銀河の里
あまのがわ通信 54
2007年　新年特別号

編集　社会福祉法人 悠和会
銀河の里 広報委員会
代表　牛坂 友美
発行　銀河の里
〒025-0013
花巻市幸田4-116-1
TEL(0198)32-1788
FAX(0198)32-1757
E-mail:yuyu@mx51.ettiki.ne.jp

暮らしと農業と生きること

宮澤　健

20年も前になる、東京の特養にいた頃、冷暖房完備の近代建築に大勢の職員で、いだれりつくせりのなか「なにか違う」と感じた。重大な何かが欠けている。それは「暮らし」ではないかと思いあたった。その後自閉症の子ども達とつきあう現場でも、そのことを更に強く感じた。便利で快適なはずの都会的生活に深いところでなじめないのは、生きていくリアリティを失うことと引き替えに得た安逸にすがっているからだと思うようになった。

「暮らし」を意識し、暮らしを求め岩手に移ってきて15年になった。農家は暮らしに満ちているはずだったが、田舎にも「暮らし」は残っていなかった。「暮らし」は快適でも便利でもなく、むしろその逆で経済的にも成り立たないところにあるようだ。

社会はますますシステム化されていく。ｹﾞﾄﾞ戦記の訳者清水真砂子は、がんばっても報われる事のない社会、厳しく進む相互監視社会にあって、人間への信頼や希望をどうやって手放さずに生きていけるのかと問いかけ、子どもの本の中の知恵にその活路を求めている。(『そしてねずみ女房は星を見た』・テンブックス)

「暮らし」はまさに知恵そのものである。その知恵は、頭でっかちな知識とはかなり違う、体も心も動員した知恵がある。中沢新一は現代におけるリアルを考えながら、「自然の背後にある見えない力が作り出す、具体的なものの価値を守り育てる姿勢が農業にある」と指摘する。その具体化してくる価値を「繊細に行き届いた心遣いを持って見守り、しかも抽象化、情報化しないでどこまでも具体性に固着するのが農の哲学だ」という。(『リアルであること』:幻冬舎文庫) 里では、暮らしのなかで、個々の生きるリアリティを賦活したい。

「暮らし」は、掃除や片付け、食事から道具の整備や、介護や看取りまで、生きる事と直結している。それらはシステムからは排除され、低く見られ、蔑まれる傾向にあり、現代人はそういうことに関わらないことがエラクてリコウなのだと勘違いし、生きる実感と知恵を失っている。システム化の波は致し方ないこととしても、個々人はそれに飲み込まれず、暮らしを大切にすることで、便利で簡単な生き方から脱却し、リアルな人生の可能性を開けないものか。今年もみんなで泥まみれになりながら農業に関わり、暮らしを作っていきたい。

餅　つ　き

里では年末、鏡餅を杵と臼でつくのが恒例になっている。

餅つきはよくやるので6年目ともなれば段取りも手順も慣れたものである。当初、あれがないこれがないなどと大騒ぎしたことが懐かしいくらいだ。急に「明日は餅つきやろうか」となっても慌てることなくサラリとこなすことが出来る。我々にも「暮らしの力」が6年間のうちについたのだろう。

慣れたとはいえ、餅つきは毎回盛り上がる。高齢者にはそれぞれ流儀があり、あれやこれやと怒鳴りあったり、杵を取り合ったり大騒ぎになる。そこにも、一人一人が歩んできた生活や人生がみえてくる。その迫力に圧倒され感動しながらの6年目だ。

今回、餅つきをしながら忘れられない事がある。この餅米は、昨年の春、Ｓさんと植えた米ということだ。Ｓさんは、開所初日に里に来て、これまで一緒に生きてきた人だ。里や里の農業を自分のこととして見守ってくれた人だ。田植のあと、稲も育ち、穂も出揃った８月にＳさんは突然逝かれた。毎年のように稲刈りも当然、一緒にするつもりでいたのにできなかったのが残念だった。

Ｓさんが残してくれたことは沢山ある。稲ばかりでなく、Ｓさんが植えてくれた種は、私の中にもあるはずだ。それをどう成長させるかが託されているに違いない。「今年からはお前がきちんとやっていけ」とＳさんが語るのが聞こえるようだ。

「今年も餅米を植えて育てて見せます」と、Ｓさんに伝えたい餅つきだった。

(淳博)

編　集　後　記

見事な晴天に恵まれた元日、私はＧＨ１でおせち料理（里の豆、野菜や想いがぎゅっと詰まったＧＨの力作！）をいただき、日向ぼっこをし（Ｔさんの部屋の暖かなことと言ったら！）、神社ではおみくじを引きました（Ｔさん大吉！）。おみくじには「翌年の計画を今から実行しなさい」。この一年、里にどんな物語が生まれるのか、それをいかに感じられるのか。わくわくの期待とともにピリリと緊張が走りました。

現在ワークステージは「悠和の杜」開店に向け疾走中です。障がいのあるなしを超えて、生産から消費までのプロセスを共に歩み、各々の生き生きとした表情が見える“暮らし”を作っていきたい。想像から創造へ。私も里から少し離れた“杜”で、豊かであると同時に厳しい“暮らし”の創造に励みます。

あまのがわ通信は、新年号から再び銀河列車に乗っていきます。里や杜の物語に驚嘆記、またそこここにある味わい深い暮らしのひとかけらに注目し、生のリアリティを共に感じる運動体でありたい。これから、どうぞ宜しくお願いします。　(牛坂)

新しい年を迎えて　平成１９年元日

迎えるということ

新年明けましておめでとうございます。

昨年の暮れは第二ＧＨで５人の利用者がノロ感染し、その対策に追われながらのクリスマス、年越しとなり、とくに慌ただしい年末年始となった。

忙しいということも含めて、クリスマスや、年末らしさ正月らしさが年々薄れていっているように感じられて気になる。

我が家にある神棚に飾る幣束は、毎年、祖父が半紙で作っていた。祖父が亡くなる最後の正月は、祖父に教えてもらいながら私が作った。祖父が亡くなって３年。喪中で迎える新年が、しばらく続いていた事もあり、久々に幣束を作って飾ろうと思ったが、祖父が残した作り方の見本が見つからず結局、今年は買ったものを飾るはめになってしまった。節目を迎える儀式が、形式だけの薄っぺらなものになっていっているような気がして悔しい感じがする。ＧＨの中で利用者の方と一緒に暮らしていると、利用者の方々の、身に付いた節目に対する真剣さや、迎える事の厳かさに比べて、平板な自分を見いだすようで、そんな想いがより一層強くなる。

年越しを間近にした年末のある朝、利用者のＴさんが「昨日は飲みすぎたぁ。ずいぶん俺飲んだべぇ。どこで飲んだか覚えてねえもん。」と話しかけてきた。実際には、飲み会はなく、酒も飲んでいないのだが、あまりにその方の表情が、嬉しそうだったのと、見事な二日酔いっぷりに、自分も昨夜酒を酌み交わしたような気分になった。夜勤者によると、その夜、別の利用者のＳさんが、部屋を出てくるなりひょっとこのような顔をして、その場で３回、回って自分の居室に戻っていったという。

その話を聞きながら私は「昨夜はやっぱり忘年会だったんだなぁ。」と妙に納得してしまった。と同時に慌ただしさにのまれて、何の心構えもなく年越しを迎えようとしていた自分に、「年を越すっちゅうのは、それなりの心構えと儀式がいるんだ。」と教えられた気がした。年越しや、盆、彼岸などの節目は、その時間的な一瞬に意味があるのではなく、それを迎えようとする我々の心構えに大きな意味があるように感じた。

大晦日の夕方、そば打ち、おせち作りなどをし、酒を飲まないでも二日酔いしていたＴさんと乾杯をして新年を迎えることが出来た。ほんの些細な事だったが、「これでやっと今年が終われる」と感じた。そのとき私はすごく嬉しくなった。そしてこんな事を感じながら過ごせる現場に居ることの幸せを思った。

今年は、新年早々、念願のお店がオープンする。そのことも含めて、銀河の里にとっても、職員それぞれにとっても、勝負の年になるに違いない。「どんな心構えを持ってこの一年を戦うか」が一人一人に問われており、その「心構え」がこの先につづく道を創っていくことになるだろう。

前向きで開かれた一年を歩んで行きたい。

(及川)

「元旦」という「慎み」

岩手大学教授:社会学　横井　修一

「元旦」というと、親（特に母）がうるさく守らせた、子供の頃の慣習を思い出します。元旦にそなえてまず大掃除。どんなに忙しくとも一通り家内を掃除し、最後に松飾りと注連縄を用意します。そして年取りの食事と大晦日の年越しそば。衣服はすべて洗濯をしたものに着替え(その当時は毎日洗濯するような家は限られていた)、親も子も普段着とは違った服装にします（「家族だけならこれでいい」と言っても「ダメ」)。といっても、時代的にも家庭的にもそれほど豊かでなかったので普段着以外の衣服もたいしたものはなかったのですが。

年が明けると、正月三ヶ日は餅と正月料理で、何か「料理をする」ような食事はしません。正月三ヶ日は仕事をしてはならないのです（ボタンつけなどの針仕事も「ダメ」)。年が経るにつれ完全に守られるのは元旦だけになってきましたが、親と過ごす正月は私もそうした慣行を守ってきました。こうした慣習は少なくとも２０年位前までは、「地方」の人々には当たり前のことだったのではないかと思います。

家を離れて暮すようになると自分自身を律することができず、親の躾も有耶無耶になりましたが、同じ頃社会的にもだんだん「正月元旦」の「慎み」はなおざりになってきました。今日では、かっては慎しまれた元旦営業（初売り）が「消費者の要望」で盛岡でも崩れるなど、個人のもつ「消費者」（欲望）の側面が強くなってけじめはなくなりました。

「元旦」は年月の流れに区切りを入れ、自分たちを「新たにする」日です。宗教的な教義とは関係なく、自分の日々に「けじめ」を入れ、誰もが「慎み」を大事にするということは、個人が日常的な自分を省みる機会になります。

そして、それはまた子供たちに自分たちの欲望や個人的な判断よりも大切なことがあることを体得させる機会でもあります。大人は子供に「命じる」ばかりでなく、大人も子供とともにこうしたしきたりを守ることが、子供にとっても重みになります。今日、子供・青年の「無軌道」が問題にされるとき、こうした一見ささやかな「しきたり」のもつ躾の意味を考える必要があるのではないかと思います。

ともあれ「忙しい」と思っていると、目的合理性（「損得」「便利」「快適」等々）がすべての基本になって、日常生活におけるけじめも忘れてしまいがちです。それが「生」の平板さ（日々に区切りがない）になり、「時間の立つのが早い」と感じるのではないかと思うのですが、私自身はこの元旦も「また一年経った」という思いが先立ちました。

平成１９年の幕開け

今年も元旦は恒例の初詣。グループホーム第１では、入居して初めてのお正月を迎える方２名を含む７名と、スタッフ４名で、外泊２名を除く全員で出掛けた。

家以外で初めてお正月を迎えるＴさん。家の思いが強くあるＴさんがどんな思いでグループホームで年を越すのだろうか？すんなりとは越せないだろうとスタッフは覚悟を決めていた。案の定、大晦日は「何でここで年を越すの？家で越すの当たり前だべじゃ。なして家族バラバラにするの？」と鋭い言葉と目で訴えてくる。その都度ｽﾀｯﾌは対決を迫られた。暮れが近づくと、家に迎えに来るよう要求する電話を何度も入れた。（留守番電話が話を聞いてくれた）大晦日夕方やっと通じて「年越したが？こっちはまだこれからだ。寒ぐねようにしてや。寒ばではらねんでや。」と穏やかに電話を掛けるＴさんが居た。

明けて元旦、晴天に恵まれ、初詣にＴさんを誘うと「何処まで行くの？」「車で石鳥谷の熊野神社まで・・・」と話すと「車で行ったって御利益ねんだ。あるがねば・・・」と辛口トーク。スタッフが部屋を尋ね一緒に支度して出てくる。よそ行きのコートとお洒落なマフラーをして「Ｔさん素敵」の声にはにかみながら微笑む。神社ではしっかり手を合わせ、おみくじを引いた。

もう一人、初めてのお正月を里で迎えたＳさん。みんなが出掛ける準備をする中「どごさいぐってや、こったな寒どき」と頑として動かない。全員が車に乗った後もう一度誘う。「誰もいねってが？息子どこだ？」と少し不安げに席を立ちなんとか車に乗ってくれた。神社に着き、車椅子に移ってもらい参道を押して歩く。本殿に進むと顔を上げ“熊野神社”の文字を見つめ静かに頭を下げる。「ここさ入れればいいのが？」とお賽銭をなげ、更に深々と頭を下げる。とても神妙なそして穏やかな顔のＳさんがいた。参拝の後、暖をとろうと、たき火の側まで行くと「あぶねぐねが？燃えるんだ。」と言っていたＳさんが、いつのまにか手を合わせ目を閉じていた（火の神様？)。自然の中に神様が居る、そんな自然と共に生きたＳさんの姿を感じ私も手を合わせる。

今年も一年実感のある年になりますように・・・・

（板垣）

思いもよらない言葉　その奥のメッセージ

イブの夜、書き残した日誌を手に、なんとなくＳさんのとなりへ腰をおろした。すると、いきなり「どぉっさり寝で、体ぁ丈夫にして、やらにゃねぇよぉ？」と声をかけられ驚いた。普段は「こばがたれ！」「ちゃんちゃらお～が～しぃ！」というのが口癖のＳさん。「あ。はい…。もうしわけないです」なんて苦笑してかわしながら、日誌に向かおうとするのだが、むこうはまだまだ語りかけてくる。「ちゃ～んとこご（頭）つかっていがねばねんだ。」はじめは「はい」と笑顔で応えていたが、そのうち、そんなかわしすらできなくなってくる。止まらない語り、穏やかな表情の中にも、逸らさずに訴えてくるように見つめるまなざし。何かを必死にこちらに伝えてくる。こちらも真剣に聞かなくちゃだめだ、そんな空気だった。くり返しくり返しＳさんが伝えてくれたのは、体をいたわり、頭を使い、しっかりと生きなければいけない、ということ。「言われだようにやるのはな、ただニコニコってして、な？、楽だがもわがんねども、それではわがんねのだ。大事なのは、こご（心）がら自分が思うどごろを生ぎるごどなのよ。おめでばまだわがんねべども な。」と笑う。私はただただ、声も出せず頷きながら、ぼろぼろ泣いた。

本当は最近、どういうわけか気持ちが落ちていた。結果、関わりを避けるように、家事仕事に逃げ、言葉も笑顔も減っていた気がする。でも誰にもそれを伝えてはいなかった。そんな自分が、Ｓさんには見えていたのか、見ていてくれたのか。日が変わり、25日。それまでとは違って穏やかな気持ちでいれる自分に驚いた。Ｓさんから、クリスマスプレゼントをもらった気がした。そっち行っちゃダメだぞってしっかり繋いでもらって、私はみんなに育てられて、守られているのかもしれない。自分の弱さに繋がってもらえる、これほど幸いなことはないんじゃないかと感じている。

（前川）